

ヨツゴと傾斜地耕作

民俗班 (徳島民俗学会)

磯本 宏紀*

1. はじめに

民具の形態的情報とともに、使用地、使用状況など聞き取り調査による情報を重ね併せて検討する手法は有効である。たとえば、榎 (2002)、香月・香月 (1986) などの鋤の使用実態から現れる地域差を探る研究を挙げることができる。

美郷村域で使用されるヨツゴは、中耕用鋤の一種であり、引き鋤として使用される。美郷村内でも広く使用されるが、その使用地の特徴として、急勾配の常畑耕作という点があげられる。本稿では、ヨツゴに焦点をあてて、その使用状況、形態、製作流通という角度から検証し、美郷村域でのヨツゴ使用と労働形態について報告する。



写真1 傾斜地にある畑

2. 鋤の種類と所有数

美郷村域において、「鋤」と総称される農具は以

下のものであり、その呼称を片仮名表記した。

- ヨツゴ：中耕用(主に急勾配地での土ハリ使用)
- ミツゴ：中耕用(主に低勾配地での土ハリ使用)
- ムツゴ：地均し、傾斜地利用
- トンガ：株切り用
- ツル：根切り、株切り用
- ハビロ：畦付け用、土寄せ用
- テング：溝付け用
- テガナ：草刈り用
- ジョレン：土すくい用

このうち、ヨツゴは鋤先が四つ又に分かれた鋤であり、美郷村で多く見られる傾斜角の大きい常畑で使用されるものとされる。表1は美郷村栃ノ谷地区の一農家での調査時(2003年10月)の鋤所有数の一例である。現存数の調査に、聞き取り調査の結果を加えたものである。この農家で耕作活動に携わるのが調査時点では2人であり、人数に相当する数を保有していることがわかる。現在は茶、野菜類、ソバを主な生産作物とする農家である。

表1 美郷村栃ノ谷の一農家の鋤所有

鋤の名称	員数	主な作業	備考
テング	3	溝付け	
ヨセテング	1	土寄せ	
ミツゴ	3	土ハリ、草取り	
ムツゴ	1	草取り	
ヨツゴ	2	土ハリ、草取り	ヨバリで使用
フタツゴ	1	土ハリ、草取り	
ハビロ	3	土寄せ	
トグワ	3	浅い耕起、根切り	
ツル	2	深い耕起、根切り	

* 徳島県立博物館

表 2 美郷村のヨツゴ計測表

No	小 字	鍬本体 先端幅 (cm)	鍬本体 の長さ (cm)	柄の長さ (cm)	柄角 (°)	銘、焼印	鍛冶屋 所在地	所有者	備 考
1	上の谷	21.6	16.5	150.2	52		月野	藤川 昌信 T15生	男性用
2	月野	21.6	18.0	150.2	50	「金森」の刻印	月野	後藤田辰雄 S2生	男性用
3	城戸	22.9	15.3	133.5	55		平	藤本 富義 S13生	女性用
4	城戸	24.0	15.8	127.5	42		平	藤本 富義 S13生	女性用
5	照尾	21.1	17.0	91.6(破損)	56		平	東野 由則 S16生	柄の長さは本来150cm程度
6	穴地	21.4	14.5	130.5	60		東条	舟井 寅良	女性用
7	穴地	23.5	18.4	149.5	63		東条	舟井 寅良	男性用
8	大野	23.5	21.3	133.1	54		丸山	丸尾 健 S7生	

3. ヨツゴの形態

ヨツゴの形態については、美郷村内においてヨツゴの各部に関する計測を行った。その結果を表2に示した。なお、計測値は以下の視点から計測した。

鍬本体鍬先までの長さは、①鍬の使用頻度により



写真2 ヨツゴ鍬先



写真3 ヨツゴ側面

摩耗を示す数値、②鍬本体歯幅は土ハリ時の使用者の負荷、すなわち、すくい取ることのできる土の量に比例し関連した数値が現れたもの、③柄の長さは使用者の身長、姿勢を示す数値、④柄の取り付け角度は、耕作地の傾斜との関係性を示す数値と予想し、計測した。なお、この柄角は一般に、佐藤（1979）によると打ち鍬は大きく、引き鍬は小さいとされる。

ここでは数値を示し、今後の広域調査に向けたデータとして提示しておく。

4. ヨツゴの使用・製作・流通

使用 ヨツゴは、ソバ収穫後の麦蒔き前の作業（11月頃）に使用された。ヨツゴの記憶として、ヨバリでの使用が常に語られる。もちろん、他の多くの作業で使用された鍬であり、用途も多いが、共同労働であるヨバリにおけるヨツゴの役割は大きなものだった。たとえば、大正期から昭和30年代にかけて行われた、常畑における自給的生産における農作業の組み合わせとして、美郷村誌編纂委員会（1969）からも確認できるが、春の麦の収穫→春から夏のイモ作→夏から秋のソバ作、そして、その後の麦蒔きへとといったサイクルがあった。その際、麦蒔き前の段階で、傾斜地につくられた常畑では、下に流れ出した土を再びすくい上げる作業にヨツゴを用いた。この作業は、土の保湿性を一定にする必要から短期間のうちに済ませる必要があった。こうした土をすくい上げ、掘り上げる作業のことをハルと言ひ、その作業はヨバリと呼ばれる共同作業で行っていた。

ヨバリ ヨバリは、昼間に牛鍬で耕起作業を行ったその夜、共同で畑1枚ごとに行われた。松明やランプで明かりをとりながら、夕食後に行われた。明かり持ちは子供の役割であり、そのほかテマガイに

より男女総出で行われた。その際、全員が横並びになって、その畑の斜面の下から上に向かって、傾斜地の土を上げる。このことを土をハルという。このテマガイは、クミヤムラ、親戚関係者総出という形が取られたほか、戸数の少ないムラ同士では、ムラ対ムラのテマガイが行われた。たとえば、穴地と下城戸とが相互にテマガイを行っていた。穴地の畑は北向きの斜面、下城戸の畑が南向きの斜面に多い。そのため、麦蒔きの時期は穴地が早く、下城戸が遅い。双方のムラはヨバリ作業において、テマガイ関係を結んでいた。



写真4 ヨツゴの使用



写真5 ヨツゴの接地面

製作・流通 ヨツゴの多くは、ムラの鍛冶屋によって製作されたものである。その際、鍬本体は鍛冶屋が、柄は使用者が取り付けただけのものであり、柄の長

さは使用者の使用状況や身体情報を示すと考えられる。それぞれのヨツゴの製作者については表2に示した。

美郷村内での聞き取り調査の結果、昭和30年代を境に農鍛冶の需要が減ったとされ、現存する農鍛冶屋はないが、ヨツゴは村内各地の鍛冶屋で鍬の製作、調整が行われていることがわかった。また、鍛冶屋の腕の良し悪し、農具ごとの得手不得手などから、使用者は概ね2～3軒の鍛冶屋を選択していたという。いずれの鍛冶屋も昭和30年代を境に廃業しているが、月野、平、東条、丸山、栗ノ木で営業していた農鍛冶があったことを確認できた。これらの鍛冶屋は行商等の販売活動を積極的には行われず、鍬を売る行商の来訪もなかったという。ヨツゴについていうなら、鍛冶屋で製作されたものが主であり、したがって、美郷村域を中心とした比較的狭い範囲での流通であり、広域の流通は見られなかった。

5. おわりに

ヨツゴに関する調査結果をまとめると以下のように整理できる。

- ①ヨツゴは、引き鍬として、柄角がやや大きいのが特徴であり、鍛冶屋の得意圏からみると、近隣地域を中心とした流通関係が考えられる。
- ②聞き取り調査による個別事例によると、柄角の大きさの違うヨツゴを、耕地の傾斜の大きい＝柄角大、小さいところでは柄角小で使うという、明確な差は数値からは認められない。
- ③畑作における共同作業であるテマガイの事例を提示したが、傾斜地耕作においてヨバリ作業を担う重要な鍬として住民に記憶され、傾斜地耕作において重要な役割を担った鍬であった。

以上、ヨツゴの形態と使用に関して報告したが、美郷村域で使用されるヨツゴがどの程度広域的なものなのか、作業内容としてどのような地域的差異が生じるのかについては、鍛冶屋の得意圏が比較的狭いものであり、依然不明である。今後は、このヨツゴがどれだけ広域的に使用されているか、あるいは使用されてきたか、また、使用されるならどのような労働形態であったのか、さらにデータを用意していく必要がある。今後の課題としたい。

文 献

榎美香（2002）：民俗知識による民具分類へのアプローチ—房
総半島南部の鍬を事例として—『民具研究』125号、1～26
頁。

香月節子・香月洋一郎（1986）：『むらの鍛冶屋』平凡社。

佐藤次郎（1979）：『鍬と農鍛冶』産業技術センター。

美郷村史編纂委員会編（1969）：『美郷村史』美郷村。